

6. 地域材の流通に関する調査研究

(1) 多摩木材センターにおける木材価格の動向

鳥海晴夫・桶川秀実

〔目的〕

「住宅の品質確保等に関する法律」(以下「品確法」が2000年4月に施行された。瑕疵担保保証責任の10年義務化や住宅性能表示制度の導入で、木材のニーズ(品質、性能等)が大きく変化してきたといわれている。そこで、多摩木材センターで取引されている木材の価格動向を調査し、いま消費者が求めている木材ニーズを把握し、ニーズにあった施業方法を提案する。

〔方法〕

多摩木材センターは、毎月、10日と25日がセリ日と決められている。調査は2003年8月から2004年1月まで、毎月2回、取引のあった全木材について調査した。調査項目は、一山ごとの納入番号、落札番号、樹種、長さ、直径、本数、材積、落札価格、材質(曲がり、節等)、特に高値で落札された場合は、中心から半径方向に5cm幅毎の年輪数を数え、木材価格と材質または年輪数の関係等について検討した。

〔結果〕

1. 木材の産地

多摩木材センターに運ばれてくる木材の産地は、荷主の住所から推計して多摩産材が約5割、山梨県産が約3割、その他が2割となっている(図-1)。

多摩産材の市町村別の割合は、約4割が奥多摩町であった。奥多摩町には大手の伐出業者があり、地元を中心に立木を買い上げ、伐出して多摩木材センターに納入している。年々、伐出業者が廃業し、減少しているなかで貴重な存在となっている(図-2)。

2. 木材の流れ

多摩木材センターに出荷された木材は、約9割が多摩地区の製材業者が落札していた。約1割は埼玉県飯能市の製材業者が落札し、西川材として流通している(図-3)。しかし、奥多摩町の伐出業者とほぼ同規模の伐出業者がある野市にあるが、この業者はすべての木材を埼玉県飯能市の木材市場に出荷しており、良質な多摩産材の一部流出が多摩産材の銘柄化に向けて、課題として残る。

3. 木材取引価格の実態

(1) 樹種別の木材価格

比較的欠点の少ない元玉の1m³当たりの平均単価の比較を行った。スギとヒノキは、木材の長さによる価格差が大きいので、3mと4mに分けた。末口径は平均である。

ヒノキは、4m(末口径22cm)30,600円、3m(20cm)26,700円だった。スギは、ヒノキに比べ半値以下の4m(26cm)15,000円、3m(23cm)9,800円であった。

以下の樹種はスギ・ヒノキに比べて取扱量が少ないが、長さ4m、直径25cm前後の1m³当たりの平均価格である。ケヤキ34,900円、イチョウ27,000円、サワラ15,000円、モミ12,200円、マツ9,400円と、ケヤキ・イチョウはヒノキ並の価格で取引されている。

(2) スギ及びヒノキの直径・年輪と木材価格

スギ及びヒノキの木材価格は、木材の長さ別に3mと4mに分けて検討した。なお、取扱量の割合

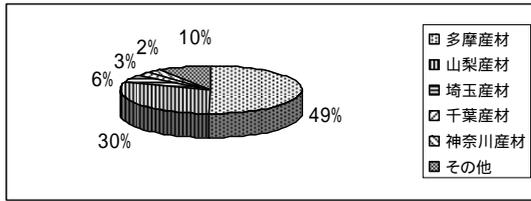


図 - 1 木材の産地

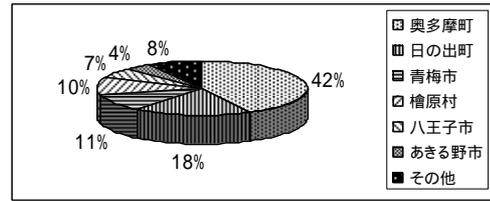


図 - 2 多摩産材市町村別割合

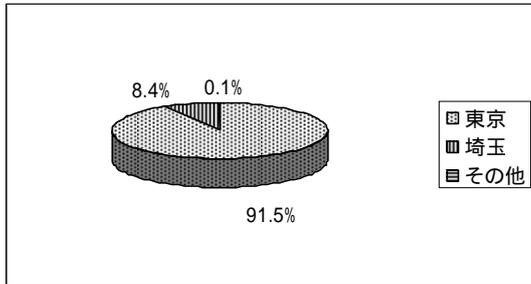


図 - 3 木材の流通

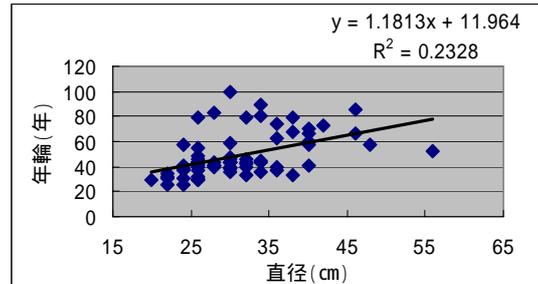


図 - 4 スギの直径と年輪の関係

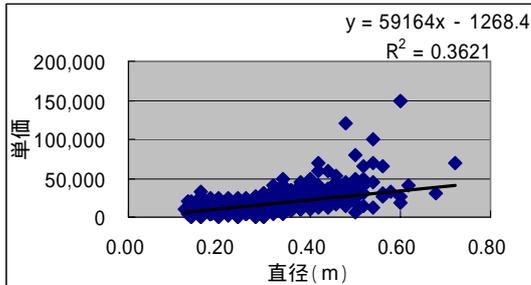


図 - 5 直径と木材価格(スギ4m)

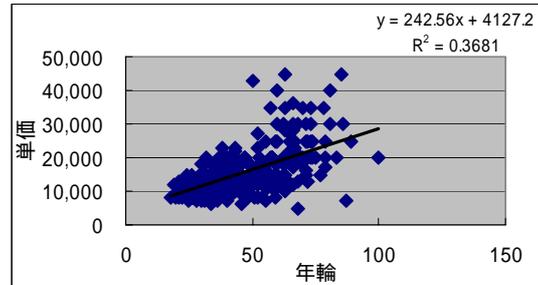


図 - 6 年輪と木材価格(スギ4m)

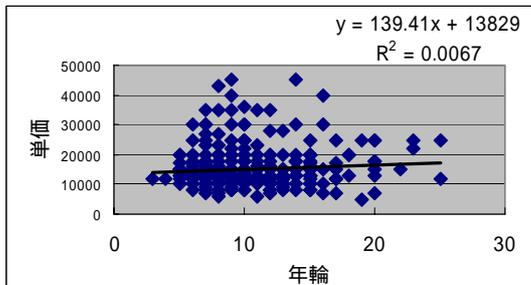


図 - 7 スギ4m 年輪と木材価格
(半径0 ~ 5 cm)

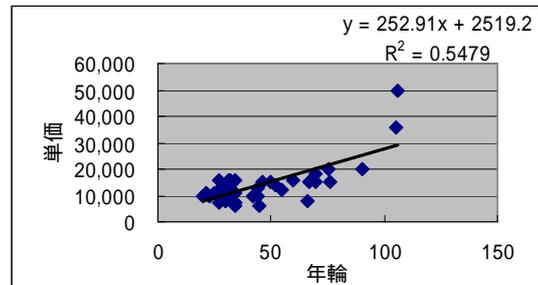


図 - 8 年輪と木材価格(スギ3m)

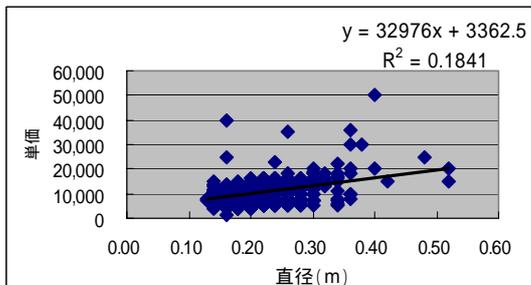


図 - 9 直径と木材価格(スギ3m)

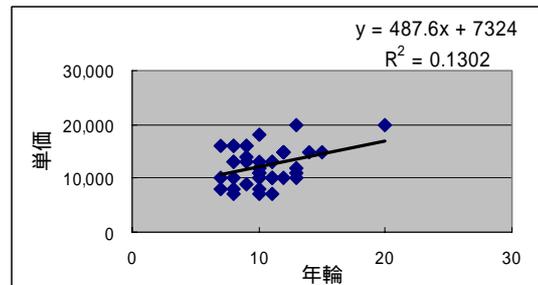


図 - 10 スギ3m 年輪と木材価格
(半径0 ~ 5 cm)

は、樹種別でスギ:ヒノキは3:1、長さ別で4m:3mは6:1となっている。スギの長さ別割合は、4m:3mで10:1、ヒノキは2.6:1となっている。これらのことから、取扱量の75%はスギで、玉切りの長さは、土台から柱まで加工出来る4mが主流となっている。

スギの直径・年輪と木材価格

スギは、直径と年輪の間に相関関係があるが、土壌・水分等地位により成長に大きな差があり、当初予想した強い相関関係にまでは至らなかった(図-4)。

スギ4mの直径・年輪と木材価格の間に相関関係があり、年輪を重ねると木は太り、太い木ほど木材価格が高くなるという一般的なことがいえる(図-5,6)。

一般的に、「積んでいる」という言葉で表現するが、若齢(10年生くらい)の年輪数が多くなると、木材価格があがるといわれている。しかし、スギ3m、4mの年輪と木材価格の関係は、当初予想していたこととはまったく逆の結果がでた。全体で見ると、相関関係がほとんどなく、若齢の年輪が積んでいても、高く売れるとは限らないことがわかった(図-9)。木材の欠点である曲がり、節、色彩(黒芯、シミ等)、偏心(中心からずれ)、傷(割れ、腐れ、穴等)などを一瞬のうちに見分けており、総合的な見地で判断していると思われる。

スギ3mの場合、年輪と木材価格の間には強い相関関係があったが(図-8)、直径との間では、やや関係が薄かった(図-7)。若齢の頃の年輪数もスギ4mの木材と同様に木材価格との結びつきが弱かった(図-10)。

ヒノキの直径・年輪と木材価格

ヒノキは、直径と年輪の間に相関関係があるが、強い相関関係ではなく、スギと同様の理由が考えられる(図-11)。

ヒノキ4mの直径・年輪と木材価格の間に相関関係があり、スギと同様のことがいえる(図-12,13)。

ヒノキ3m、4mの年輪と木材価格の関係は、スギと同様に相関関係がほとんどなく、若齢の年輪が積んでいても、高く売れるとは限らないことがわかった(図-14)。

ヒノキ3mの場合、スギ3mと同様、年輪と木材価格の間には強い相関関係があったが(図-16)、直径との間では、やや関係が薄かった(図-15)。若齢の頃の年輪数はスギ3mの木材より木材価格との結びつきが認められた。(図17)。

(3) 落札されないスギ・ヒノキの傾向

素材生産業者が多摩木材センターに運んできて、落札されない木材が毎回でてくるので、その原因を検討してみた。

売れ残る木材は、スギの場合9割以上が末口径20cm~80cm、ヒノキでは6割以上が末口径20cm~60cmの木材で占められていた(図-18,19)。製材業者の話を総合すると、「品確法」施行後は角材寸法が3寸角から4寸角へと強度重視に木材ニーズが移行している。中目材以上の末口径になると、端材部分が多くなり、木取りが難しくなる、ということである。実際に、4寸角は末口径が18~20cmで採材が可能で、この直径当たりの需要が最も多くなっている。

また、シックハウスが懸念される集成材より、無垢の心持ち材を求める人が多くなっており、4寸角の柱材の需要は、今後ますます増加するものと思われる。したがって、森林所有者は、一律の施業ではなく、多品種製材品の供給が可能な中・長伐期施業を心掛けていく必要がある。

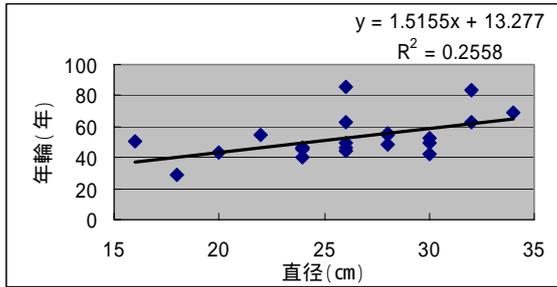


図 - 11 ヒノキの直径と年輪の関係

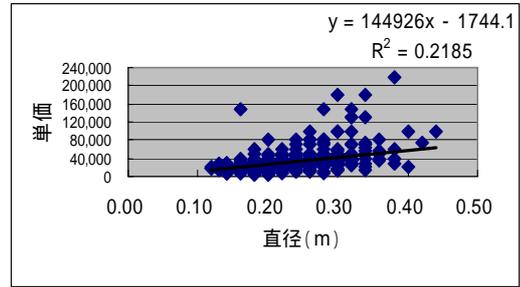


図 - 12 直径と木材価格(ヒノキ4m)

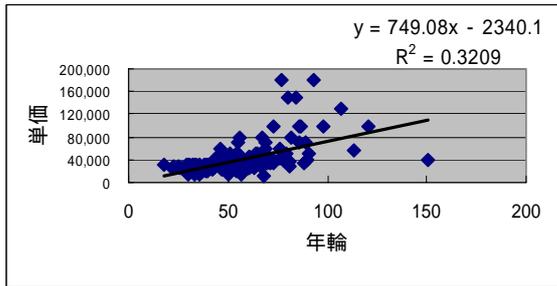


図 - 13 年輪と木材価格(ヒノキ4m)

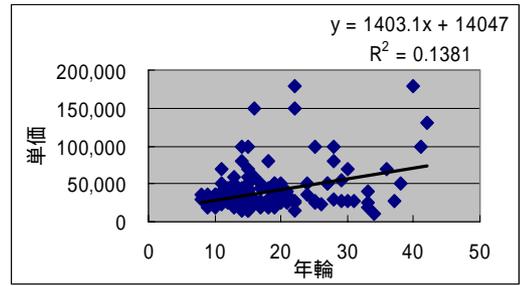


図 - 14 ヒノキ4m 年輪と木材価格
(半径0 ~ 5 cm)

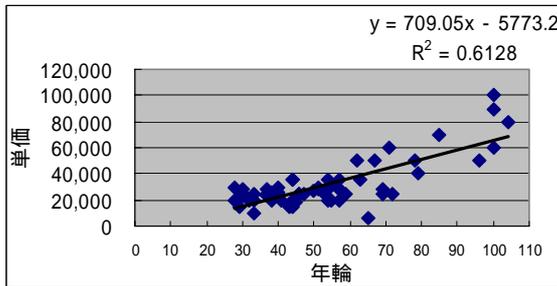


図 - 15 年輪と木材価格(ヒノキ3m)

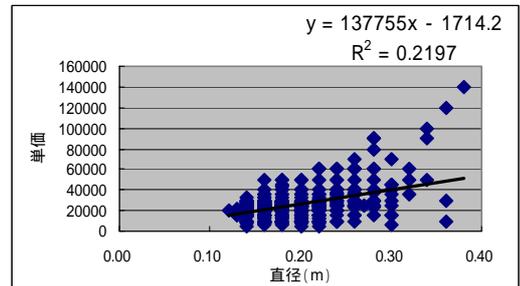


図 - 16 直径と木材価格(ヒノキ3m)

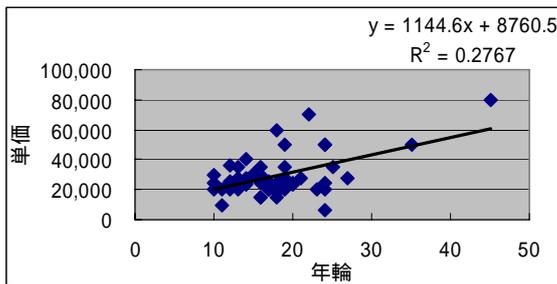


図 - 17 ヒノキ3m 年輪と木材価格(半径0 ~ 5 cm)

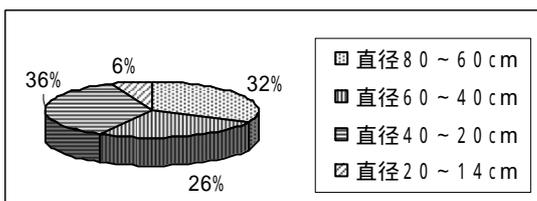


図 - 18 売れない木材(スギ)

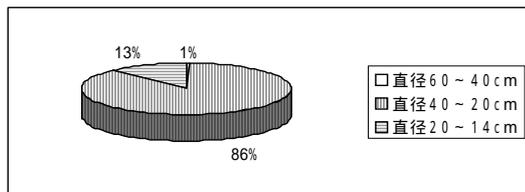


図 - 19 売れない木材(ヒノキ)